1　作　　物

項　　目	作　　業　　内　　容
（１）麦の栽培管理	（今月の作業のポイント） 〇麦の栽培管理 〇次年度水田のジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）対策 １か月予報（12 月 18 日高松地方気象台発表）では、気温は高く、降水量は平年並か多く、日照時間は　平年並か少ない見込みである。生育が旺盛になることが予想されるため、土入れや麦踏みを重点的に行い、中間追肥の施用など基本管理を励行し、適正な生育管理に努めることが重要である。 ア　土入れ 土入れは、肥効の向上や茎数調節、雑草防除、根際の乾燥防止に効果があり、排水溝の補修も兼ねた湿害防止対策になるため、特に、排水不良のほ場では積極的に行う。 土入れには、跳ね上げロータ一付き管理機等を用い、１㎝程度の厚さになるように覆土する。 写真１　土入れ 土入れ後は、必ず溝を排水溝につなぎ、降雨による滞水を速やかにほ場外に排水できるよう整備する。 イ　麦踏み 麦踏みは、茎の生育を一時的に抑制して徒長を防止し、適度な分げつ数を確保することで有効茎を増加させる効果がある。また、根の発育を促し、耐寒性の強化や土壌乾燥時の根張りの促進、黄化症状の軽減効果が期待できる。 写真２　麦踏み ３～４葉期頃から茎立ち期までに 15 日程度の間隔で３回程度、鎮圧ローラー等で麦踏みする。特に早播きなどで過繁茂や徒長気味のほ場や、粗孔隙が大きく乾燥害を受けやすいほ場では、必ず実施する。 ただし、土壌水分が多い状態で行うと、土が固くしまり、根の生育を阻害して逆効果となるため、土壌が乾いてから実施する。また、土入れと麦踏みを合わせて行う場合は、先に麦踏みを行うと、折れた茎葉を土が覆って生育障害を起こすため、必ず麦踏み前に土入れを行う。

項　　目	作　　業　　内　　容
	ウ　中間追肥 　11 月は種のほ場では、１月に中間追肥として 10 a 当たり窒素成分で２kg施用する。土壌pHの低下を防ぐため、肥料は硫安ではなく、NK 化成を施用する。 　湿害の発生したほ場や、葉色が落ちて黄化しているほ場では、生育促進のため、中間追肥は必ず施用する。 　また、早めには種し肥料が切れると黄化症状が発生しやすいため、葉色の SPAD 値が 40 を下回らないうちに早めに追肥する。 エ　雑草防除 　１月になると、土壌処理した除草剤の効果が低下して、後発雑草が発生し始める。 　特に土壌水分が高いほ場や出芽不良のほ場では雑草が繁茂しやすい。除草剤の処理にあたっては、雑草の発生状況を観察し、草種に応じた薬剤を選定のうえ、雑草の葉齢の小さいうちに散布する。また、土入れや麦踏みの実施など、耕種的防除に努める。 　複数の草種が発生しているほ場では、一年生広葉雑草とイネ科雑草に効果があるハーモニー剤が比較的有効である。本剤の散布適期はスズメノテッポウでは５葉期まで、カズノコグサでは１～３葉期であり、時期を失しないように散布する。なお、湿害等により一時的に薬害（葉の黄化や生育抑制）を生じることがあるので、事前にほ場の排水対策等を講じておく。 　広葉雑草には、アクチノール B 乳剤を雑草生育初期に散布する。ただし、カラスノエンドウは薬剤だけで除草するのは困難であるため、土入れや抜取り作業による完全除草に努める。
（２）次年度水田のジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）対策	冬季の耕うんは、ジャンボタニシを物理的に破砕するとともに、貝を厳寒期（１～２月）の寒風にさらすことで個体数を減らす効果が高いので、被害が目立つほ場では必ず実施する。湿田では溝切りを行い、排水を良くして乾田化を図る。土壌が乾燥して固い厳寒期に、トラクタの走行速度を遅く、PTO を上げロータリーの回転を速くし、土壌を細かく砕くよう浅めに耕うんする。未発生ほ場への貝の持ち込みを防止するため、トラクタ使用後は必ず洗浄し、付着した泥を洗い落とす。

（作成　農林水産研究所）